

こんにちは！ 歴史資料室の鈴木です。

明治時代、女性の職業として教師、産婆、看護婦、電話交換手などがありました。平成 27 年（2015）6 月 19 日配信の「あおもり歴史トリビア」第 163 号でも、電話交換手のお話をしましねたね。

やがて、大正時代になると新しい職業につく女性も増えていきました。例えば、大正 8 年（1919）の『東奥日報』に、次のようなものがあります。

5 月 27 日付では、青森運輸事務所が出札係に女性を採用するという記事がありました。また、12 月 25 日付には、市内米町の青森荷札製作所の石版部が、業務拡張のために数名の女性画家を募集していると出ています。青森県内では、ほかにもタイピストやデパート店員、車掌、医師など、様々な「職業婦人」が誕生しました。

この頃、青森県で初めて、新聞の編集に関わる仕事に就いた女性がいきました。それは、東奥日報社で女性編集者兼記者を務めた佐藤なみという方です。

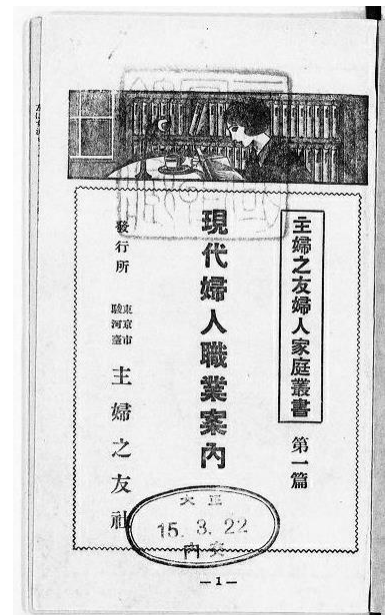
『東奥日報社と大正時代』（1966 年 東奥日報社）によれば、明治 34 年（1901）生まれの佐藤なみは、大正 9 年の春に 18 歳で東奥日報社に入社し、校正係の仕事に就きました。入社を勧めたのは、同社社員だった郡場徹（植物学者の郡場寛の実弟、都々逸・川柳作家の郡場秋蝶）です。きっかけは、彼女の友人が郡場の姪であったことでした。

同社では、すでに営業部門には 2 名の女性社員がいましたが、編集部門では佐藤が初の女性社員でした。のちに、元社員を集めた座談会で、彼女は入社した当時の事を、着物姿で通勤し、夜勤や残業の時には社長がアイスクリームを御馳走してくれることもあったと話しています。

大正 11 年に結婚のために一時退社しましたが、大正 14 年の再入社後は、校正の仕事に加えて県内の名流夫人訪問記や、家庭向けの記事を執筆することもありました。

昭和 3 年（1928）頃には 4 名の女性部員を束ねる校正部の主任となり、その後、夫の樺太赴任に伴い退社しましたが、昭和 12 年に青森に戻ると 3 度目の入社をしました。のちに関連印刷会社へ転出しましたが、昭和 36 年まで校正の仕事が続けられたそうです。

現代の私たちから見れば、女性が仕事を続けることは当たり前のことかもしれませんが、でも、100 年前の 18 歳の女の子が、まだ男性ばかりだった新聞社に入り、家庭の都合で中断しながらも、30 数年の長きに亘り校正の仕事に継続されたことは、私にはとても興味深く感じられました。



『現代婦人職業案内』
（1926 年 主婦之友社、
国立国会図書館デジタル
コレクション）